

## 建中寺經藏の建立縁起と大藏經

### 序

このたび建中寺に伝わる大藏經と經藏についての研究を依頼され、改めて自坊の經藏の建立に遡って歴史的に顧みる機会を与えられ、わずかではあるが今まで不明であつたことを明らかにすることが出来たと思う。この研究に対して、名古屋工業大学の河田克博氏により、数々の建築・伝記に関する資料を紹介され新たな分野に対して研究が進んだ。また、佛教大学の今堀太逸氏には古文書の解説にご協力いただいた。松永知海氏には、建中寺所藏の大藏經の刊行年次を確定していただいた。各位には感謝申し上げる。以下これらの資料に基づき經藏の歴史的・建築学的考察、収蔵されている大藏經の刊行年次に関わる考察、經藏内に安置されている十三宗祖師の製作年次の考察、そして、



写真1 經藏全景

村  
上  
真  
瑞

『古経堂詩文鈔』に残る建中寺と知恩院との關係についての考察等進めたいと思う。

## 第一章 建中寺經藏建立の経緯について

まず、經藏の建立を發願した申譽辨靈上人について考察し、經藏建立の経緯について調査してみたい。当山に伝わる過去帳にはあまり多くの事跡は書かれていない。そこで『名古屋市史』社寺編を調べたところによると次のように記されている。以下は隱居先の清浄寺に伝わる『常念佛開山申譽上人傳』である。

師、諱辨靈稱金蓮社申譽自號瑞華本州熱田人也、爲兒時、某屋携手登寶龜山途中見市廛招牌、字々讀去、人皆異之、我師到譽上人、試授經、一習便誦、上人撫掌嘆曰、今幸得寧馨兒遂許入室、薙染漸長、偶異靈慧游學關東籍于増上寺宗門章疏無不硏究、又隨目黒長泉律院德門和上聽華嚴天台之幽旨、典壽秀海同室讀書屢談其法要、蓋此兩士者、博學宏才、而留中之麟鳳也、師年二十四、登壇受具、後適于京師、拜受天章、亦留三四年、後歸于郷、居無幾何、天明戊申歲、依官選住本州津島邑西方寺、寛政戊午歲、稟國命移城東高岳院、文化甲子歲、再命轉相應寺、文化辛巳歲、三

命擢建中寺、蓋此寺特賜紫袍之巨刹、而國中一宗之魁首也、師聲名於是愈盛、雖然師心不好聲利每有課佛餘暇、閉室讀書、未嘗一日廢之、又有好詩及書畫癖、梅山春郷東溪東亭等、深慕師高尚、時々來問津、傍輩書畫譚、夜闌空心、無一水粥之設、不自知膝之前席、是入書畫禪、忘賓主、三昧爲食故也、嘗自謂我愛書畫、唯觀古人高情逸韻、養我法自惠命而已、死則徒爲他有、何執其物耶、今試言其證、有一僧嘗訪師禪室、侍者點茶盃、爲道樂製、床上挂宗旦書、僧數賞嘆不已、終乞價之、師不允、莞爾笑曰、我非待價者也、若其買之則子之力何及、他日託侍者曰、吾儻死則與此於彼、々後來勿復用此、沒後遂貽之、或人曰、反昔人挂劍於家樹、豈非風流中美談乎、師年六十二、文政辛巳秋、乞遯寺職、弗聽再乞、遂賜清浄寺爲隱棲之地、又給齋供及黃金若干、先是邦君褒賞師學該内外寺務不懈、今復資閑居之地、國恩特渥、人皆榮之、於是移住此寺、大興土木之事、亡幾丈室、書齋、庫院等、殆復舊觀、師閑居之後、有僉兒、夜窺其寢室、時は仲夏、師在蚊帳之中、僉兒按劍窺而責曰、財何在、財何在、師自若示曰、此隱室無入之地、焉藏財之爲、兒去、嗚呼何以、電光朝露身、檀阿僧祇耶長時苦種乎、語間時移、夜已鷄鳴、僉兒駭去、他日師語人曰、昔者師子尊者、得聖果後、爲外道所害、宿業所招、又何免、我不怖

死、意在于此也、嗚呼自非道心堅固之人、焉能至此哉、師性豪邁、無阿世之心、錢言曰、我親教師、名吾以辨靈、我傳戒師、號吾以金申、字々皆無背面、以表我心、論所謂名詮自性者、其此之謂乎、于時今茲乙酉春、師臥數日、羣謚焉之期、遺囑弟子含城曰、夫德興山者邦君香火之地、而淨宗一方之名藍也、我觀天下、如此處必有藏室、然而無之、豈非精舍闕典乎、我多歲雖有創建之志、資財未饒因循至此、頃數年財貨僅足、汝等聞官辦之、使我得報國家大恩萬分一、則死無憾矣、又曰當寺雖市井、閑靜而不躁、於修般舟三昧、不亦善乎、汝等其圖之、必勿與餘財於弟子以爲梯、其他滅後修善件々、不可具載、言竟令看護人焚香修日課百萬遍回向、端坐念佛而寂、享齡六十七、實文化八乙酉正月二十八日也、塡子德興山咨師也、匿德藏光、密修密行、顯功滅後、不亦偉哉、至如其富資財、以信敬辦才天故也、是以素願圓成、意是尊天冥應之賜乎、將是專修念佛不求自得之巨益乎、不可得測也、越丁卒哭日、弟子含城、使樛山寫其真請純撰其道蹟也、余不才不事文華、聊拈摭見聞一二、紀以代香火云爾、

建中寺經藏の建立緣起と大藏經  
建中寺見住賜紫沙門辨純謹識  
(名古屋寺社記錄集)<sup>(1)</sup>

### 【現代語訳】

師の諱は辨靈、金蓮社申譽と稱し自らは瑞華と呼んでいた。うまれ育った土地は熟田の人である、子供の時、或る人が手を携えて、寶龜山に登った。その途中町の店に掛かる看板を見て、字という字をすべて読み尽くし、人は皆凡人ではないと思った。我が師匠の到譽上人（建中寺第十九世神蓮社到譽辨及喚阿方遍光）は、試に經を授けたところ、一度習えばたちまち暗誦した。上人は掌を撫でて感嘆して、今幸に幼少よりすぐれている子供を得ることができると言い、遂に入室を許された。髪を剃ってしばしの間を経ると、ひときわ高く目立ち他と異なり、賢く智慧ある僧となった。關東に游學し増上寺に籍をおき、淨土宗の宗義を説く經典研究書籍は研究しつくした。又、目黒の長泉律院の徳門和上に師事して華嚴、天台の奥深い奥義を聴講し、典壽秀海と部屋を同じくして書を讀みしばしば佛法の根本について討議した。おもうにこの阿氏は、學広く才能豊かな者として、僧の中のめつたにないすぐれた人物である。師、年二十四才にして戒壇に登り具足戒を受ける。後に京都に行き天子の墨跡を拜受した。三、四年京都に留まり、後に到譽上人（建中寺第十九世神蓮社到譽辨及喚阿方遍光）のもとへ歸った、居ることわずかにして、天明、戊申の歳（一七八八）に、公に選ばれて尾張の津島、西方寺の住職となった。寛政、戊午の歳（一七九

八）、尾張の国の命を受けて名古屋城の東、高岳院に移った。文化、甲子の歳（一八〇四）、再び命により相應寺に轉住した。文化、辛巳の歳（一八一二）、三たび命を受けて建中寺の住職として世にぬきこんでた。おもうに此の寺は特別に將軍より紫衣を賜った大寺であり、尾張の国の浄土宗における筆頭寺院である。師の名声はここに至つていよいよ盛んになった。然りといえども師の心は名利を好まず法要の暇があるごとに、室を閉じ書を讀むこと、未だかつて一日としてやめることはなかった。又詩と書画を好む趣味があつた。梅山春郷、東溪東亭等は、深く師の高尚なる趣味を慕つた。時々来て學問をおさめるための方法をたずねる傍ら書画の遺蹟を深くした。夜も半ば過ぎて心空しくして、一杯の水や粥のもてなしもなかったが、おのずから膝が席の前に乗り出していくのが解つた。書画の禪定に入るとはこの事である。客人を忘れ、書画三昧を食とするという訳である。かつて自ら、私が書画を愛するのは、唯だ古人の氣高い心世俗を離れて雅やかな様を觀て、私の自ら命を慈しむ法を養うのみである。死んでしまえば無駄に他人の物となる。どうしてその書画そのものに執着するだろうか、いやしない。今試みにその証明となる事象を言ふと、ある僧がかつて師の禪室を訪ねた。侍者が茶碗を選び出した。深い趣向品であつた。床の上には宗旦の書が掛かつていた。僧は数えて感心して、ほめたた

えるだけであつた。終にこれらの売値を聞いた。師は聞き入れず、まろやかに笑つて言つた、私はよい売値を待つて売ろうとしている訳ではない。若しあなたがこれを買おうとするならば、あなたの力がどうして及ぶだろうか。いや及ばない。他日侍者にゆだねて言つた。私がもし死ねばこれらを彼に与えよう。彼は後に再び来たが二度とこれらを使うことはなかった。亡くなつた後、遂にこれらを彼に贈つた。ある人はこの事を、昔の人が家の樹に剣を掛けたという故事に反して、どうして風流中の美談でないといえようか、いやまさに風流中の美談であると言つた。師の年六十二才、文政、辛巳（一八一二）の秋、建中寺の住職を退きたいと願つたが聞き入れられなかった。再び乞うたところ遂に清浄寺を賜り世俗を離れ静かに暮らす場所とした。又清らかな供え物といくらかの黄金を給わつた。これに先立つて尾張徳川家は、師の學問が内外にわたつて十分に備わっていることと、寺の勤務に怠りがないことを褒賞した。今復た静かに暮らすことの出来る土地を賜つた。尾張の国からの恩は特にあつく、人は皆この事をとても榮譽な事とした。そこでこの寺に移り住み、大いに木材・石・土などを使つての工事を行った。ほとんど減ぶ寸前の方丈室、書齋、庫裡等、殆んど元の形に復興した。師が静かな場所に住みだした後、泥棒がやつてきて夜師の寢室をうかがつていた。ちやうど真夏のことで、師は蚊帳

の中にいた。泥棒は劍の柄に手を添えながら蚊帳をあけて厳しく要求して言つた。「宝はどこにあるか。宝はどこにあるか。」と、師は自ら次のように示していつた。「この隠居は無人の地である。どうして宝を納めてあることがあろうか。いやない。掃りなさい。ああどうして、電光や朝露のようにすぐに消えてしまふ身に、数え切れないほど長い時間苦しみを受ける種を植えるのだらうか。」と、話している間に時は移り、夜はすでに鶏の鳴く時刻になつていた。泥棒は驚いて逃げ去つた。他日、師は人に話して言うには、「昔、師子尊者は、修行をして覺りを得た後、異端邪説を語る人によつて殺された。過去に行つた行為の潜在力は又どうして免れることが出来よう。いや免れることは出来ない。私は死を怖れることなく意はここにある。」と、ああ、求道心堅固な人でなければ、どうしてこの境地に至ることが出来よう、いや至ることは出来ない。師の性格は、氣性が激しくて才知がすぐれ、世間の調子にあわせてへつらう心は無かつた。冗談に次のように言つた。「我が親は教師である。私を辨靈と名付けた。我は傳戒師である。私は自ら金申『金蓮社申譽』と名付けている。字それぞれ皆背面がない。そのように我が心は表面である。論に言うところの名は固有の性質を備えるとはこの事を言うのであろうか。」と、時に今ここに「文化八年（一八二五）乙酉の春、師は数日病で横になつたが、

たちまちにして死期が訪れた。弟子の含城に死後の事をたのんで次のように言つた。「徳興山建中寺は尾張徳川家の靈に香を供え灯明をあげて供養するところである。そして、浄土宗の尾張藩における有名な寺院である。私が世の中を見るに、この様な場所には必ず経藏があるものである。しかしながら今の建中寺にはそれがない。どうして、寺院の原則に反している点ではないということが出来ようか。いや間違ひなく寺院の原則に反している。私は多く年をとつてしまひ、たとえ経藏を創建する志があつたとしても、資金がまだ充分ゆとりがないままはつきりさせないでここまで來てしまつた。この頃数年の間に財貨はほんの少しではあるが足りてきた。おまえ達は、尾張藩の役人にこの事を説明し、聞いてもらいなさい。私は、尾張の國からいただいた大恩の萬分一でも報いさせてもらえるなら、死んでも残念に思うことはない。」と、又言つた。「建中寺は、たとい町中にあるとはいつても、閑静であつて騒がしくはない。般舟三昧を修行するのに、こんな良い場所はない。おまえ達は、これを計画して必ず餘財を弟子に与えて、それによつて災いの原因をつくつてはならない。」と、その他死んだ後の追善法要のことなどいろいろ述べたが詳しく載せることは出来ない。言ひ終えた後、看護人に香を焚かせ日課として百萬遍念佛の回向をさせた。正坐して念佛し亡くなった。享年六十七才。まさに

文化八年の乙酉正月二十八日であつた。徳興山建中寺に卒塔婆を建て師の遷化をなげいた。(師は)徳を隠し光を納めて、秘密に修し秘密に行じた。その功德は遷化の後に顯れ出でる。なんたる偉業であらう。その資金が豊かであつたことについては、辨才天を信じ敬つていたという理由による。このようにして、日頃の願いが完全に成就した。そのわけは、知らないうちに天から与えられるおかげを尊んでいたたまものである。まったく専ら念佛を修すれば求めずしても、おのずから与えられるという巨大な利益であるといえよう。その理由を推し量ることはとうてい出来ない。ここに遷化の命日にあたつて、弟子含城は、梅山に師の真影を描かせ、誤りのないことを心から願つて師の生涯の履歴を撰述させた。私は才能無く、美しい文章を得意としないものである。わずかながら見聞きしたことの一二を拾い取つたものである。この行状を紀すことにより、香を焚き、灯明をともすことに代える。

時に文政八年、乙酉の歳、夏五月 建中寺住職・紫衣賜りし沙門辨純、謹んで記す。

と記されるように、辨靈上人は若い頃から勉学を志し「僧中の麒麟」といわれたと記されるように大変優秀な成績を残した人である。逆算して生まれは、一七五八(宝暦八)年であり、建中寺第十九世神蓮社到譽辨及喚阿方遍光大人について出家し

ている。この到譽上人は、建中寺歴代上人過去帳の記述によると、

#### 寛政五癸丑

第十九世神蓮社到譽辨及喚阿方遍光大和尚

#### 五月十六日

當山住職トナツテ入院ノ年月日不相知 天明五乙巳年正月廿三日祝融火災ニ遭ヒテ建中寺全山焼キ失ヘトモ其ノ後幾モ無ク天明丁未 年間開口拾五間奥行拾四間ノ本堂ヲ再建シ本尊ハ鳥佛師作ト傳ヘル坐像阿弥陀如来ヲ安置ス 此功績ヲ以テ中興號授與サル年月不明 七十九歳ニテ遷化<sup>(2)</sup>

と記されるように到譽上人は、天明五年(一七八五)の火災の後建中寺を再建した中興上人である。第十八世嚴譽上人が天明五年四月十三日に遷化しているところから、天明五年四月以降は実質的に住職となつていたと考えられる。『常念佛開山申譽上人傳』において辨靈上人は幼くして到譽上人の弟子になつたとされているところから、天明五年以前から到譽上人は建中寺に入山し役を行つていたと思われる。到譽辨及と記されることから辨靈上人の師匠であることは間違いないと思われる。

後、辨靈上人は天明八年(一七八八)津島西方寺、寛政十年(一七九八)高岳院、文化元年(一八〇四)相應寺、文化八年(一八一二)建中寺、文政四年(一八二二)清浄寺と転住し、

文政八年（一八二五）六十七歳にて遷化されている。転住した願番から当時の寺格の順位を知ることができる。又遺言を弟子に託すことによつて、經藏を建立したいという強い意志は、清淨寺へ隱遁してからも続き弟子にその氣持が伝わり建立に至つたと思われる。

以下は建中寺土藏内に納められた古文書のマイクロフィルムをもとに名古屋工業大学助教授河田克博氏が解説された資料によるものであり、書き下しの読みは佛教大学史学科教授今堀太逸氏にご指導頂いたものである。

『清淨寺より建中寺經藏建立のため地型築寄進したきにつき城下へ声懸かりを願う覺』

### 覺

当御寺隱居申譽上人儀存命之内、弟子清淨寺江申置ニ而當御山内ニ經藏建立被致度志願ニ付、先般清淨寺奉願候上遺金を以右經藏地型築ニ取懸り申候処、日雇人数ニ而ハ中々堅リ兼申候旨、大工棟梁并日雇頭共申聞候由付而ハ、御城下町くミ輩志有之面々江地型築寄進ニ預り申度旨清淨寺より申出候間、何卒 御城下町中江御声懸り致成下度乍候ハ、早行ニ地型築出来可申候、尤御場所柄之御儀ニ付、縮り方等之儀ハ御寺よりも精々入念為相守可申候間、清淨寺より願之趣御聞済成下候様仕度、上存候間御達申上候、已

上

（文政九）戌六月

建中寺

役者

寺社御奉行所

全願院<sup>(3)</sup>

### 【書き下し】

當御寺隱居申譽上人儀、存命之内、弟子清淨寺へ申置に而、當御山内に經藏建立被致度志願に付、先般清淨寺願ひ奉り候上、遺金を以、右經藏地型築に取懸り申候処、日雇人数に而は中々堅兼申候旨、大工棟梁并日雇頭共申聞候由付而は、御城下町くミ輩志有之面々へ、地型築寄進に預り申度旨、清淨寺より申出候間、何卒 御城下町中へ御声懸り成下致度乍（まま）候はば、早行に地型築出来可候、尤御場所柄之御儀に付、縮り方等之儀は御寺よりも精々念を入れて相守為申可候間、清淨寺より願之趣 御聞済成下候様仕度、上存候間御達申上候、已上

（文政九）戌六月

建中寺

役者

寺社御奉行所

全順院

と示されるように申譽辨靈上人の名称入りの文書が滅後弟子によつて、隠居先の清浄寺より建中寺経藏建立のため地型築寄進したきにつき城下へ声懸かりを願っている。これに對して「城下町衆の地型築寄進への志願對する承諾書」が以下のように出ている。

達之趣、町奉行江及引合候処、町々之内志有之地型築寄進ニ罷出度存候者ハ御場所柄ニ候得共罷出候而も不苦旨、町代庄屋等罷出候節々輕く咄合置候様可致旨、惣町代江申渡候旨申問候条得其意、右寄進ニ罷出候ハ、清浄寺申相猶受締り方火之元可入念候、

六月<sup>(4)</sup>

【書き下し】

「城下町衆の地型築寄進への志願對する承諾書」  
達之趣、町奉行へ引合に及候処、町々之内志有、地型築寄進に、罷出度存候者は御場所柄に候得共、罷出候而も不苦旨、町代庄屋等罷出候節々、輕く咄合置候様致可旨、惣町代へ申渡候旨、申問候条、其の意を得、右寄進に罷出候はば、清浄寺申相猶受締り方火之元念を入る可く候、

六月

以上遷化の後も弟子達が遺言に基づいて経藏建立に尽力している様子が理解できる。特に火の元を注意するように書き添えられているところを見れば、天明五年の火災で本堂等が消失した時の影響であると考えることができる。

さて、当山に伝えられる『当山歴代上人過去帳』によると

文政八乙酉年

第廿四世金蓮社申譽上人白阿瑞華辨靈大和尚

一月廿八日

當山住職トナリ後清浄寺に隠居時不相知文政八乙酉一月

廿八日同寺にて遷化<sup>(5)</sup>

と記され次の二十五世については

文政八乙酉年

第廿五世甌蓮社文譽上人唯阿履信辨純大和尚

六月親七日

當山ニ轉住ノ年月不相知 文政八乙酉年六月廿七日當山

ニテ遷化<sup>(6)</sup>

と記されている。二十五世辨純上人は前述の『常念佛開山申譽上人傳』を文政八年の五月に書いた人であるが、次月の六月二十七日に遷化されている。辨靈上人の没年と同年である。

以上の記述から考えて、経藏を完成させた住職は建中寺第二十六世であると言わねばならない。過去帳によると



天保二辛卯年

第廿六世眞蓮社宗譽上人辨成業阿事一鳳足大和尚

三月十八日

建中寺ニ轉住ノ年月不相知

天保二辛卯年三月十八日當山ニテ遷化 七十二歳<sup>(7)</sup>

と記される。没年が天保二年（一八三一）であるから、過去帳では住職となった年月は不明であるとしているが、前住職が文政八年（一八二五）に遷化されているので、経蔵が上棟した文政十一年（一八二八）には建中寺の住職であつたと思われる。

また、戒名を見ると辨成と言う文字が見いだされるところから、辨靈上人の弟子に当たると考えられる。

以上のことは、経蔵内に安置されている棟札を保存修理工事に際し下ろしたところその記述によつて確認することができた。以下は棟札の記述を翻刻したものである。

【建中寺経蔵棟札<sup>(8)</sup>】

〔表面〕

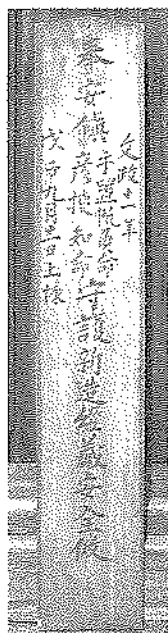


写真2 棟札表

文政十一年

建中寺経蔵の建立縁起と大蔵經

奉安鎮 手置帆負命 守護新造經藏安全攸  
彦狹知命

戊子九月十一日上棟

〔裏面は棟札を八段に分けて記入されているので上から翻刻することとする。〕

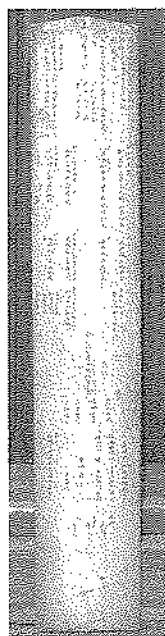


写真3 棟札裏

（第一段）

文政八年乙酉六月十一日新初

同十一年戊子九月十一日上棟

經藏壹基

文政十一年戊子九月廿七日入藏供養

六千九百三十卷

一切經全部 二千九十冊

貳百七十五帙

願主 當山廿四世

金蓮社申譽上人白阿瑞華辨靈大和尚

文政八年乙酉正月廿八日遷化

（第二段）

山主 廿五世

甌蓮社文譽上人辨純大和尚

同 廿六世

眞蓮社宗譽上人辨成大和尚

御用人寺社御奉行兼

水野勝兵衛源忠榮

寺社御奉行

小山清兵衛藤原政好

(第三段)

役者

光壽院文雅西堂

同

金順院辨宿西堂

寺社御奉行所吟味役頭取

速水甚之丞源氏興

同吟味役

島居武太夫平正忠

(第四段)

普請中宿坊

宗心院辨信西堂

寺社御奉行所調方組頭

竹中九兵衛源恒陶

同 同心

永井左兵衛

松下吉三門

多賀代助

淺野半平

(第五段)

奉師命以遺金淨財造立之

(第六段)

遺弟

齊譽舍城

常譽靈台

義譽靈門

沙弥瑞玄

(第七段)

大工棟梁佐々木善兵衛源茂高

同脇棟梁佐々木善左衛門時宣

同 楠 与右衛門正義

魚住 勘吉

吉右衛門

後見

御城下棟梁役近藤三良平

(第八段)

木挽

茂八

日雇頭

忠八

同

忠右エ門

この棟札の表面の記述からは、佛教寺院建設にもかかわらず、佛典からの引用ではなく神道の神の名が記されている。手置帆ておきほ・彦狭知命ひこさちのみことは上棟式で祀られる工匠の神々であり、神社での上棟式の際には必ず祀られ、棟札にも必ず書かれるものである。なぜ建中寺経蔵の棟札が神道の形式をとったのであるのか理解しがたい部分である。

次にこの棟札の裏面の記述からは、三人の住職名を確認することができる。先ず願主が二十四世金蓮社申譽上人白阿瑞華辨靈大和尚で文政八年（一八二五）一月二十八日に遷化されている。続いて、山主二十五世として瓶蓮社文譽上人辨純大和尚の名が出ている。この住職は、前述の清浄寺『常念佛開山申譽上人傳』を書いた人である。しかし、過去帳にも書かれているように、文政八年（一八二五）六月二十七日に遷化されているので、経蔵の完成を見ることはできず、次の同二十六世として、

真蓮社宗譽上人辨成大和尚の名が出て来るのである。過去帳の記述のように辨成上人は天保二年（一八三一）三月十八日遷化とされているので、経蔵を完成させた時の住職であると確認することができる。

よって、経蔵の建立を発願した辨靈上人は、前述の清浄寺の『常念佛開山申譽上人傳』によっても、また住職過去帳並びに位牌及び棟札の記述によっても文政八年（一八二五）一月二十八日に遷化されている。また、『常念佛開山申譽上人傳』を書いた第二十五世辨純上人も同年六月二十七日に遷化されている。そして、その三年後文政十一年（一八二八）第二十六世辨成上人によつて建立されたことになる。また、棟札によると、文政八年六月十一日に新初、文政八年九月十一日上棟、文政十一年九月二十七日入藏供養という詳しい完成に至るまでの日程も確認することができる。

また、棟札には四人の弟子の名が出ている。すなわち、齊譽舍城、常譽靈台、義譽靈門、沙弥瑞玄、の四人であるが、この中の齊譽舍城とは、前述の清浄寺『常念佛開山申譽上人傳』において、たびたび名称が出ていところの、辨靈上人より遺訓を受けた弟子舍城であることも確認することができる。したがって辨靈上人の弟子達が協力して建中寺の経蔵建立に尽力した様子を伺い知ることができる。

なお、經藏西面上層中の間には「轉法輪藏」の額が掲げられているが、知恩院尊超法親王（有栖川宮織親王第八の王子）の筆によるものである。尊超法親王の在世期間（享和二年一八〇二—嘉永五年一八五二）から考察するならば、經藏成立年次と合致していることから、經藏の建立を記念して額の染筆を知恩院の尊超法親王に対して依頼していたことが理解される。

## 第二章 建中寺經藏内に納めらる大藏經の

### 刊行年次

次に經藏内に納められている大藏經について考察するならば、『黄檗版大藏經刊記集』解題によると、一口に黄檗版大藏經といっても初刻時期には和刻の流布本を底本としていた物を萬曆版によつて覆刻したり、萬曆版にはない藏外典籍を加えたりして、刷った時代により少しずつ内容が異なり一六七八（延宝六）年（滋賀県日野正明寺藏本）・一六八八—一七〇三（元禄期）（獅谷法然院所藏本）・一八一八—一八二九（文政）期（上越教育大学所藏本）・昭和期（黄檗宝藏院版本翻本）の四期に分けて考えられるとされている。

建中寺經藏に所藏されている黄檗版大藏經がどのようなルートから購入され、刷られた年代はいつ頃かを調査して、明治初

期に多数の大藏經が盜難に遭い、古本屋に売却され、川瀬商店の厚意により、もう一度建中寺に川瀬商店からの寄進によつて戻されている事が解った。その時に紛失して行方のわからなくなった大藏經については、他の寺院から売却された古本などによつて川瀬商店により補填されている事実も判明した。従つて他寺院の藏書印と川瀬商店の藏書印が押された大藏經が多数存在している。その中で目を引いたもので、表には「國寶」と印が押してあるものがある。それらの經典の最後に「瑞雲堂」「辨靈之章」「施主川瀬代助」という三種の印が押してあることからこの經典こそが歴史を伝えている物である。すなわち、建中寺に經藏を建立するという篤い思いをもっていた辨靈上人は、經藏が完成する前に遷化されているが、すでに黄檗版大藏經は自分の私費で購入していたのである。それは經典の最後に「瑞雲堂」「辨靈之章」の押印があることによつて明らかである。「瑞雲堂」とは、辨靈上人の私設書庫の名称ではないか推測できる。「辨靈之章」はまさに辨靈上人の藏書を示す印鑑である。従つて松永知海氏によると、黄檗山の大藏經販売目録に建中寺に販売した証拠がないとされるのは、辨靈上人が私費をもつて書店等から購入されたためであると結論づけられる。

その後、二代の住職の努力によつて經藏が完成したとき、辨靈上人の遺志により私費で購入された大藏經が建中寺の經藏に

おさめられたものと思われる。そこで、この大蔵経は尾張の国の宝とすべきものであるということで、經典に表には「國寶」という印を押したのであるかと推測するところである。



写真5 蔵書印「辨靈之章」  
「瑞雲堂」「施主川瀬代助」

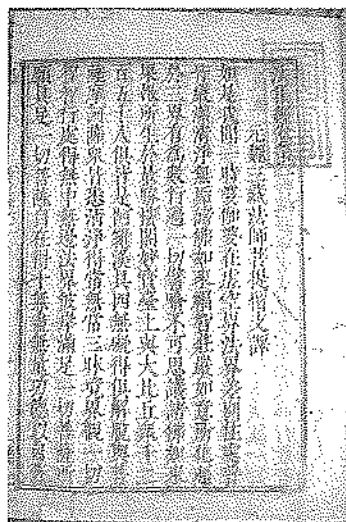


写真4 蔵書印「國寶」

## 第二章 建中寺経蔵の建築物としての意義

次に経蔵の建築的特徴を考察してみたい。経蔵は、三間四方、重層、宝形造、本瓦葺の和様を基調とし、方一間に裳皆がついた当時では典型的な建築様式であり、本山知恩院と同型式を一回り小さくした規模である。経蔵の調査が名古屋市の教育委員会によって平成十年（一九九八）三月二十四日に行われ、屋根裏に入り棟札を撮影したところによると、文政十一年（一八二八）九月十一日上棟と書かれている。当初より外観に変化がないことは、天保十二年（一八四一）の『尾張名所図絵』に記載されている図と現状が同一であることから確認することが出来る。以下の説明は建築の専門家である名古屋工業大学助教授河田克博氏の説<sup>(10)</sup>に基づくものである。

全体に薄く漆喰を塗ってある。これは天明の火災によって被害を受けた教訓から強い防火意識の下に施された使用であると考えられる。土蔵作りの経蔵は他にもあるが、建中寺の経蔵のように木造の上に全面漆喰塗りとした例は他にあまり存在しない。その意味からも建中寺の経蔵は希少価値のある文化財であるということが出来る。

次に経蔵内の輪藏について考察すると、輪藏はいわゆる八面輪藏である。江戸期の雛形によると、概して二種類ある。一つ

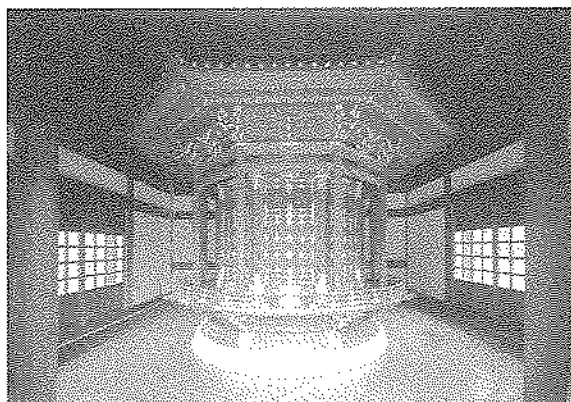


写真6 輪 藏

は、入側八角形を構成する柱がそのまま足下の地覆まで来る形式であり、後の一つは、八角形が縁部分で留まり、足下には輪藏軸が露出する形式である。建中寺経藏は前者の形式に属する。近世以前の輪藏遺構は現在三十余棟確認されるが、後者の形式の方が多くと思われ、その意味でも貴重な文化財ということが出来る。

また、当輪藏は、軸部・組物様態など唐様を基本として、虹梁・纂股・長押に和様の要素を取り入れている。全体に彩色は

ないが、良質の樺材を主材として木鼻・纂股などに精緻な細工・彫刻を施している。特に側回り八面の纂股に彫刻されている意匠は、縁起の良い福徳を将来するとされる独特の「宝すくし文」である。すなわち①西面 七宝に丁子 ②南西面 金囊 ③南面 宝鍵に宝珠 ④南東面 軍配団扇に宝卷 ⑤東面 宝船に分銅 ⑥北東面 隠れ傘に丁子 ⑦北面 隠れ蓑 ⑧北西面 打出の小槌に依 以上八面の纂股には独特な彫刻意匠が施されている。輪藏を回すことにより、福徳が招来されることを願ったの彫刻であるとも考えられる。以上は河田克博氏の説に基づいた解説である。

#### 第四章 建中寺大藏經の散佚經典

大藏經の散佚状況を確認するために、昭和六十三年三月二十五日発行の『上越教育大学所蔵黄葉鐵眼版一切經目錄』を用いて、目録順に整理した。

昭和五十五年十二月八日に佛教大学浄土宗文献センターの浄土宗の収蔵典籍調査の一環として、当時課長三輪晴雄氏、松永知海氏などにより調査が完了した。その結果収蔵されている大藏經に何部かの欠本があることが判明したが、その時の整理で欠本となっていたものが発見されたりして、思いの外欠本が少

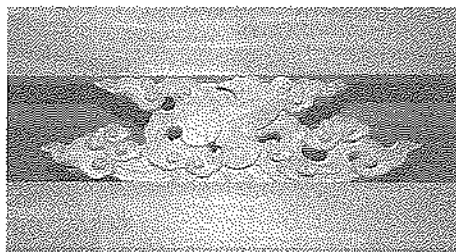


写真 11 東面（西面が正しい）

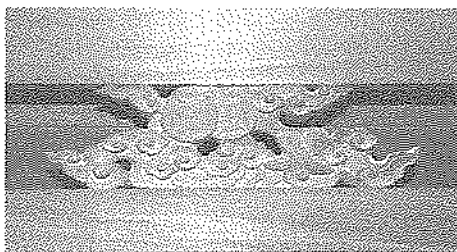


写真 7 西面（後の調査で東面が正しい）

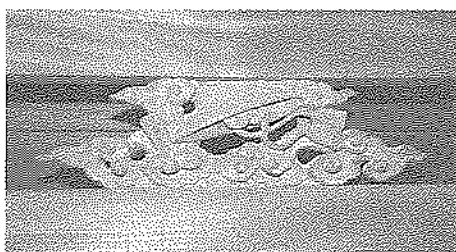


写真 12 北東面（南西面が正しい）

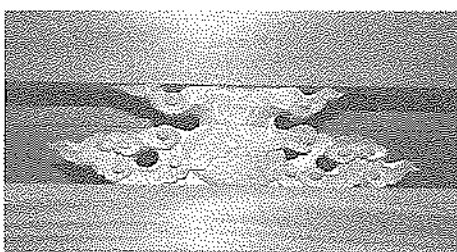


写真 8 南西面（北東面が正しい）

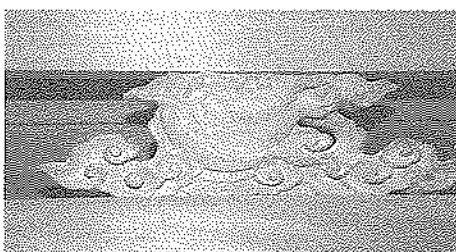


写真 13 北面（南面が正しい）

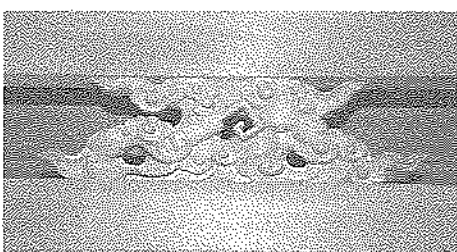


写真 9 南面（北面が正しい）

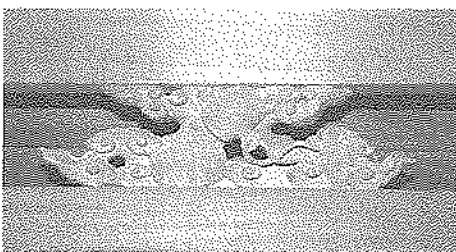


写真 14 北西面（南東面が正しい）

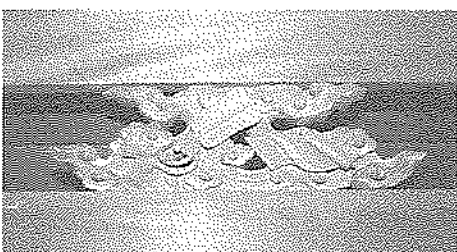


写真 10 南東面（北西面が正しい）

ないことが解った。これは、最新の黄蘗版の目録が上越教育大学によってまとめられたことによる恩恵が大きいものである。

この目録は、新潟県中頸城郡三和村上田の宮崎家に伝わる経蔵に八面輪藏が安置されそこに黄蘗版大藏経が先祖代々門外不出で守られたことにより完全な形で保存されていたものを、上越教育大学が中心となつて目録をとつたものである。興味深いのはこの経蔵の棟札に文政五年（一八二二）新始、文政六年上棟と書かれている点で、建中寺経蔵が文政十一年（一八一八）九月十一日上棟であるから、五年前にできた経蔵で、大要に近い時代のものであつたことである。

それは、今回この『上越教育大学所蔵黄蘗鐵眼版一切経目録』により整理して、經典の並び順が、建中寺にあるものと合致して大要整理しやすかつたことから同時代の目録の利便さを感じた。もう一つ気づいたことは、建中寺の大藏経は何度も散逸してその都度補填していることである。新しそうな帙におさめられたものは、刊記に「黄蘗版其他諸經印刷發賣元京都市上京区木屋町通二條下ル 一切經 印房武兵衛」として京都市の区政が始まつた明治以降の印刷であることや、また川瀬代助氏の蔵書印のあるものは、名古屋市西区本町三丁目五番地 書房川瀬代助として、これも名古屋市の区政が始まつて以後の明治時代以降の補填であることが解った。それらの本に

は、建中寺ではない他寺院の蔵書印（浄本寺一切經・張州龍華山常德寺蔵書など）が押されたものも数多くあることから、川瀬代助氏が古本屋を経営されていて、他寺院から持ち込まれた黄蘗版によつて建中寺経蔵から散逸した經典を補填したものであることも解った。それ以外にも、新しい装丁で印刷されたものには、施主名（名古屋市石町二十二番戸 施主 稲垣 弥助・名古屋市 玉屋町 施主 片野 銚児）や戒名などが書き込まれ、戒名に書かれている命日の一番新しいもので「明治三十一年三月十三日」の靈位が見いだされることから、明治三十一年以後に新たに印刷した大藏経であり、寄付を募つて補填したものもあることも解った。以上平成十五年（二〇〇四）十月十一日から十三日まで三日かけて整理したところ多くの新しい発見があり先輩方の様々な苦勞を垣間見ることができた。以上の年代を考慮すると、経蔵の整理をして新たに欠本を補填した住職は、三十二世の杉山激典上人の時代であろうと思われる。

以下今回明らかになつた欠本の一覧を付記する。番号は上越教育大学目録に準じている。







写真 15 法然上人木像

經藏の修繕を期として像を本堂から移動させたと伝え聞いている。昭和三十五年（一九六〇）十月の期日入りの紅白幕、及び祖師の安置壇の下方の板戸裏面に同じ期日に經藏修理が完成との書き付けがあることから、經藏の修繕中に伊勢湾台風が来襲し被害を受け、再び修繕したようである。祖師像の安置壇を増設した期日が昭和三十五年（一九六〇）十月であることから、釈尊像及び祖師像を移動したのはその時期である。

さて、この像については、それぞれに尊名を書き入れた板があり、又尊像の座している高座等の文字を入れることが出来る空間に施主や回向対象者の戒名俗名などが刻んである。そこで釈尊像及び日本十三宗の祖師像についてその記述から像の制作

年代を考察してみたい。

十三宗祖師尊名板及び台座に書かれている内容。

①尊名板 釈迦如来 施主 後藤新十郎

②尊名板 曹洞宗開祖 道元禪師御尊像 中区東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 中区養老町 小川 善三郎

台座 盛屋院正山探念居士 福壽院正室妙法尼上座 大正十年十二月二十七日

③尊名板 融通念佛宗祖師 良忍上人御尊像 中区東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 東区赤塚町 土井 慎一

台座 名古屋市東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

昭和八年十一月 施主名古屋市東区赤塚町二ノ二四 土井 慎一

専心院釋教道 正行院釋尼妙教 真行院釋道意 温香院釋尼妙麗

④尊名板 日蓮宗祖師 日蓮御尊像 中区東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 東区大曾根町 水田 外治郎

台座 名古屋市東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 名古屋市東区大曾根町 水田 外治郎



写真 16 弘法大師本像

大修院行學日詣信士 修行院妙乘日唱信女 妙貞庵日周信女  
誠締庵日光信士

⑤尊名板 浄土宗開祖 法然上人御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 西区和泉町 高橋 正彦

台座 名古屋市東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 高橋 正彦

大譽徳本道念居士 昭和七年一月二十八日 俗名 高橋彦

次郎 行年六十九才

随譽教順貞正大姉 妻 ぬい

⑥尊名板 真言宗開祖 弘法大師御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 永田貫一 三輪秋吉 舟橋弥吉 三輪豊吉

台座 昭和八年三月 寄付者 永田貫一 三輪秋吉 舟橋

弥吉 三輪豊吉<sup>(12)</sup>

⑦尊名板 律宗開祖 鑑真大和上御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 遠州濱名町 桑原 小三郎

台座 施主 静岡縣濱名町積志村西ヶ崎 桑原 小三郎

先祖代々 妙臺院玉室貞顔大姉

⑧尊名板 天台宗開祖 傳教大師御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 中区下堀川町 服部小十郎

台座 名古屋市東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 服部小十郎

先祖代々

雲香淨晴信士 安永七年二月二十日

夏屋晴雲信女 明和四年五月六日

温空實玄庵主 弘化三年九月二日

聽空諦玄大姉 安政四年八月二十三日

澹空可笑庵主 明治三十一年七月二十日

乗空誓松法尼 大正二年一月五日

仙空宝樹居士 明治四十四年四月八日

仁空義道庵主 明治六年一月二十七日

瑞岳院円空良笑居士 大正六年十二月二十五日

⑨尊名板 法相宗開山 玄昉僧正御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 中区門前町 佐藤 佐太郎

台座 法名 釋妙行尼 妙鏡尼 妙轉尼 至德尼 妙受尼

受信

施主 名古屋市中区門前町 佐藤 佐太郎

⑩尊名板 華嚴宗開山 良辨僧正御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 中区小林町 安藤 竹次郎

台座 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 名古屋市中区小林町 安藤 竹次郎

法名 釋善立 釋尼妙宗 釋即住孩子 釋尼示法 釋是心

⑪尊名板 眞宗開祖 親鸞上人御尊像 中区東橋町 大仏師

岡田天孝 九拜作

施主 中區城代町 伊藤権八郎

台座 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 名古屋市中区城代町 伊藤権八郎

新晃院釋歡喜居士 靈 昭和七年六月四日寂

⑫尊名板 時宗開祖 一遍上人御尊像 中区東橋町 大仏師

岡田天孝 九拜作

施主 中区小林町 脇田つ衿

台座 大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 名古屋市中区小林町 脇田つ衿

釋興證 位 大正八年六月七日亡 俗名 脇田 定造

林岳壽松居士 大正二年九月二十七日亡 俗名 林 助三

郎

釋尼妙順 大正三年六月四日亡 俗名 野村 でん

釋証涼 昭和八年五月二十五日亡 俗名 田中 康雄 二

十六才

⑬尊名板 黄檗宗開山 隱元禪師御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

施主 東区研屋町 木村 又三郎

台座 名古屋市中区東橋町大仏師 岡田天孝 九拜作

施主 名古屋市中区研屋町二丁目六七番地 木村 又三郎

昭和八年十一月

先祖代々靈位

⑭尊名板 臨濟宗開祖 栄西禪師御尊像 中区東橋町 大仏

師 岡田天孝 九拜作

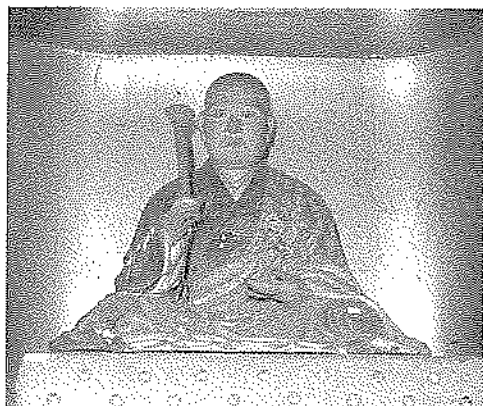


写真 17 申譽辨靈上人木像

施主 中区南鍛冶町 武田 安  
台座 名古屋市中区東橋町大仏師 岡田天孝 九拜作  
施主 名古屋市中区南鍛冶町四丁目八番地 武田 安  
盛徳院富岳良安大居士  
常楽院鶴室妙壽大禪尼  
清隆院活道玄機居士  
徳臺院花岳妙運大姉  
俗名 武田 安 仙林松壽居士  
俗名 武田 つる 禅心即成居士  
鉄山玄舟大姉

以上は釈尊及び日本十三宗の祖師像に刻まれる内容である。経蔵内には願主の辨靈上人の木像と位牌も安置されているのでそこに刻まれている内容も考察したい。

⑮御経蔵建立之願主

建中寺二十四世

申譽上人木像

文政八乙酉歳

正月二十八日

⑯位牌

金蓮社申譽上人白阿瑞華辨靈大和尚

建中寺二十四世賜紫沙門

文政八年 乙酉 正月二十八日 遷化

遺弟 開譽隆典和南

以上調査したところによると、戒名に刻まれた没年が昭和八年（一九三三）以降のものがなく、③の良忍上人像の台座には昭和八年十一月と⑥の弘法大師像の台座には昭和八年三月と刻まれていることから、その他の釈尊像及び十三宗祖師像の制作年代も昭和八年前後であると理解することが可能であろう。また、辨靈上人の位牌の施主は遺弟開譽隆典とされているが、この施主は建中寺の二十五世辨純上人・二十六世辨成上人・又棟札に記名されている四人の弟子でもないことから辨靈上人の

別の弟子が存在したことも判明した。

## 第六章 知恩院第七十五世徹定上人と

### 建中寺との関係について

次に、大藏經に關して知恩院第七十五世順譽徹定上人と建中寺との關係について大要興味深い記事を見いだすことができたので付け加えたいと思う。浄土宗総本山知恩院第七十五世の法燈をついで、明治七年（一八七四）から明治二十年（一八八七）まで十三年にわたって浄土宗の代表的な指導者としてその任を果たした養鷗徹定上人は、明治維新という一大変革期に知恩院住職・浄土宗管長として、宗門徒弟の養成と教育機關の設立、魔佛毀釈によつて荒れ果てた教田の開拓、布教伝道師の養成と布教の全国的実施、幕藩体制下の一宗・制度の見直し、無祿化した知恩院の永續維持と寺門の経営刷新とに、寢食を忘れて快刀乱麻の手腕をふるい、その実現に獻身した。現在の知恩院や浄土宗の興隆はひとえに養鷗徹定上人の愛宗護法の精神と、その偉大な業績にあると言つても過言ではないと思う。

さて、この徹定上人の著作である『古経堂詩文鈔』記類三十三から三十二の中に建中寺に關することが書かれている。

### 明契大藏經記

慶長十五年東照公令海内牧伯爲尾張敬公大城于名護屋居焉城之四隅設樓櫓々上置黃金鵝尾故世称曰金城其良位之櫓上藏明契大藏經七千三百餘卷蓋以鎮鬼門靈符云明治紀元戊辰秋廢藩置縣時將毀城櫓乃徒納其經卷於城東建中寺々屬於敬公香火院今茲庚辰秋寺主吞澄和尚請德川氏頒附諸吾華頂山學校於是余焚香漱手而繙閱之卷帙齋整字畫鮮明頗爲完本此藏本明萬曆中達觀密藏諸禪師易梵筴爲方冊尔來人皆喜輕便省搜索勞是邇諸禪師之賜也皇國延寶中黃鑒鉄眼禪師覆刻此藏本布于世然則明藏爲鑒藏之原本豈可不貴乎在昔吾鼻祖闍藏經及五反其刻苦勉強可以想見也然至今時東諸蒿闍如弁毛偶有檢閱者亦不過誦文耳且夫弗探滄海則不能獲明珠無登崑山則安求連城苟欲入毘盧藏者不依于此將何依耶甲戌以還吾學校一變舊習除去虛文而就實踐從今後求學者搜三藏之玄奧究五乘之妙願如龍樹菩薩啓竜闕之秘鑰若玄奘法師譯般若之大典開慧眼抽覺悉以報答大檀那附託之厚意是余所延頸而望也<sup>(13)</sup>

### 【現代語訳】

#### 明版大藏經記事

慶長十五年（一六一〇）に徳川家康公は天下の諸侯に号令して尾張の藩主源敬公（義直公）のために大城を名古屋につくらせた。源敬公がここに住するにつき城の四隅にやぐらを設け、

そのやぐらの上に黄金の鵝尾を置いた。そのような理由から世に金城と呼ばれるようになった。その東北の方位のやぐらの上に明版大藏經七千三百餘卷を収藏した。思うに東北の鬼門を鎮めるために神仏のお札がわりに大藏經を置いたのであろう。さて、明治紀元戊辰（一八六八）の秋に廢藩置縣が行われた時、ちょうど名古屋城を壊そうとしたものがいた。やぐらをまもる人々は、この明版の大藏經を城の東にある建中寺内にある源敬公の靈をまつるお堂（御靈屋のことか）におさめた。今ここに庚辰（明治十三年・一八八〇）の秋、建中寺住職呑澄和尚は、徳川氏にお願ひして、華頂山知恩院の學校に寄贈した。そこで早速私（徹定上人）は香をたき手をきれいに洗って、この大藏經の巻帙をひもといて読み調べた。すべての字や絵は整つていて鮮明でありすばらしく完全なものであつた。この藏本は中国明時代の一五七三—一六一九（萬曆）年間、達觀禪師、密藏禪師がインドのターラの葉に書かれた「ばいよう」に説かれた經をもとにして方冊版の大藏經として出版した。それ以来人々は皆簡単に目的の經論を探すことができ、搜索する苦勞を省くことができることを喜んだ。これらはすべて諸禪師方の功績である。日本国の一六七三—一六八〇（延寶年間）中に黄檗山の鉄眼禪師は、この明版の大藏經を覆刻して世に広めた。したがって、明藏は黄檗藏の原本である。どうして貴くないことがある

うか、いやこんな貴いものはない。かつて私の尊敬する元祖大師法然上人がおられた。大藏經を読み返すこと五回にも及んだ。その刻苦勉強する姿を目のあたりに思い浮かべるべきである。ところが残念なことに、今の時代になると、經典を高い棚の上にあげて束ね置いておくことまるで髪の毛を編んでゆわいていくようなものである。たまたま經文を見るものがいたと思えば、經文を誦誦するために開いているに過ぎない。夫れ青海原を探さなければ輝き光る玉を獲ることはできない。崑崙山に登ることが無ければどうして十五の城と交換しても価値のあるような宝玉を求めることができるか、いやできない。かりにも毘盧舍那佛の悟りの世界に入ろうと志すものであれば、この大藏經によらずして何によるものがあるか、何もない。甲戌（明治七年・一八七四）私は華頂學校をふりかえつて、古い習慣をすべて変え、虚しく価値のない文を読むことをやめて、本来の佛・実践である大藏經の研究に就かせることにした。今より後の學者よ、經律論の三藏の奥義を搜りて、五乗の妙なるやしないを究めるべきである。龍樹菩薩は龍宮城の秘密の鍵を開き、あるいは玄奘法師が般若經の大經典を譯して智慧の眼を開くが如くにさとりをおさめ、すべて報恩の心をもつて大檀那である建中寺の呑澄和尚、尾張徳川家にこたえ、この厚い志を頼みとすべきである。これこそが、私が、首をのばしてまちわび、希望す

るところである。

と説かれている。この記事から、明治維新の世の中が混乱している様子が手にとるようにわかる。名古屋城もある時には壊されようとして、東北の隅やぐらに鬼門を鎮めるために安置してあつた明版の大藏經を建中寺へ移したということがあつたのである。そして、その大藏經を当時の建中寺住職呑澄和尚は徳川家の許しを得て明治十三年（一八八〇）京都知恩院の華頂學校へ寄贈したのである。このことは、すでに建中寺には經藏内に黄檗版大藏經が納められていたためであろうと推察することができる。その時の知恩院住職徹定上人は、その厚い志に心打たれて、この記事を書いたのである。また、明治七年（一八七四）は徹定上人が知恩院の住職となつた年であるから、明治十三年は就任六年後である。知恩院及び浄土宗の刷新改革を進め、江戸時代の因習を打ち破り原典研究の重要性を認めていた徹定上人が明版大藏經の寄進を心から歓迎している様子が現れている。法然上人は大藏經を五回も読破されたことを始めとして、龍樹菩薩や玄奘三藏に習い佛教を学ぶものに対して大藏經を研究して成果をあげ、寄贈した建中寺や尾張徳川家に対して報いるように勵ましている。

では、この時知恩院へ大藏經を寄贈した建中寺住職呑澄和尚について、建中寺の『当山歴代上人過去帳』によると、

明治二十二年己丑年

第三十一世 得蓮社清譽上人即阿辨道呑澄大和尚

八月九日

阿弥陀寺ヨリ転住 年月不相知

明治二十二年己丑年八月九日遷化 五十四歳<sup>(14)</sup>

と示され建中寺の第三十一世であり、年代は不明であるが白河の阿弥陀寺より転住し明治二十二年己丑（一八八九）八月九日の遷化であることが解る。

また、建中寺の什物の中に徹定上人の軸が一幅ある。この軸の背には、『華頂前門主養鷗大教正清譽老周忌追薦之詩』と書き入れられている。清譽とは先に示した、得蓮社清譽上人即阿辨道呑澄大和尚のことであるから、明治二十二年遷化の呑澄上人一周忌にあたり徹定上人から追善の詩が贈られたものである。この追善の詩の内容について、佛教大学教授今堀太逸氏に解説していただいたので、ここに紹介したい。

「道々有仙風 名亦敬香 高僧多是得退齡

音容髣髴蓮臺 友爲讀般舟三昧經

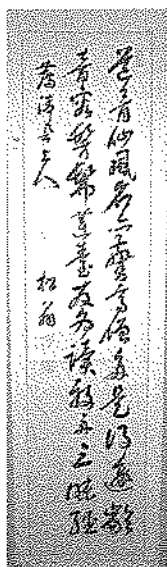


写真 18  
清譽上人老周忌追薦之詩



廣清譽上人 松翁 淨土門主 徹定之靈<sup>(15)</sup>

【現代語訳】（清譽上人の歩いてきた）道のあらゆる所に人並みでない仙人のような風格がある。またそれは敬うべき芳しい香りとも言えることができる。多くの高僧は長寿を得ることができる。（清譽上人の）声と姿からは（極楽浄土から来迎する阿弥陀佛の）蓮のうてなを髣髴させるものがある。友（清譽上人）のために『般若三昧經』を読み（一周忌の追善供養を勤めよう。）

（清譽上人の）追善のために 松翁（徹定上人の号）

「淨土門主 徹定之靈」

この一輻の軸によって、徹定上人と建中寺の吞澄上人との親交の様子がよく理解できる。

徹定上人は明治七年（一八七四）から二十年（一八八七）までが知恩院の住職在任期間であったことから、明治二十二年（一八八九）遷化した吞澄上人の建中寺住職在任期間と合致する。また徹定上人から吞澄上人への追善の詩が建中寺に所蔵されていることから、徹定上人と建中寺の吞澄上人との親交も伺える。したがって、徹定上人の『古経堂詩文鈔』の記事の内容の真実性がはつきりと建中寺の資料からも証明することができる。よって、知恩院と建中寺と双方の資料から明治十三年に明版大藏經が建中寺吞澄上人から知恩院徹定上人へ寄贈されたこ

とが証明できるのである。

## 結

以上建中寺の經藏及び大藏經について、創建年次と大藏經の刊行年次、經藏の建築物としての意義、等について論じてきたが、今まで經藏について不明な点が数々明らかになった。ちょうど平成十四年から三年計画で、名古屋市からの補助金も交付され、建中寺經藏保存修理も完成を見た。良い時期を得てこの論をまとめることが出来たと思う。この機会を与えていただいた関係各位、また諸資料の紹介、学術的判定方法等ご教授いただいた各位には心から感謝申し上げます。

## 註

- (1) 『名古屋市史』社寺編七四六頁―七四八頁
- (2) 建中寺藏『当山歴代上人過去帳』より
- (3) (4) 建中寺土藏内古文書のマイクロフィルム
- (5) (6) (7) 建中寺藏『当山歴代上人過去帳』より
- (8) 建中寺經藏内安置の棟札の翻刻
- (9) 『黄檗版大藏經刊記集』大觀幹郎・松永知海共著三七〇頁
- (10) 平成十四年十月二十七日 建中寺大藏會での講演「建中寺の經藏について」の記録による。但し、この講演の後、建築業者が輪藏の忠柱を調査したところ、東西南北の方向がふつてあり、

今までの位置が一八〇度ずれていたことが判明した。従って、西面 宝船に分銅 北西面 軍配団扇に宝巻 北面 宝鍵に宝珠 北東面 金襴 東面 七宝に丁子 南東面 打ち出の小槌に俵 南面 隠蓑 南西面 隠れが笠に丁子 が正しい位置となる。

- (11) ③尊名板 融通念佛宗祖師 良忍上人御尊像 中区東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作 施主 東区赤塚町 土井 慎一

台座 名古屋市東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作 昭和八年十一月 施主名古屋市東区赤塚町二ノ二四 土井 慎一 として昭和八年十一月にこの像は納められていることが判明した。

- (12) ④尊名板 真言宗開祖 弘法大師御尊像 中区東橋町 大仏師 岡田天孝 九拜作 施主 永田貫一 三輪秋吉 舟橋弥吉 三輪豊吉 台座 昭和八年三月 寄付者 永田貫一 三輪秋吉 舟橋弥吉 三輪豊吉 として昭和八年三月にこの像は納められていることが判明した。

- (13) 『古経堂詩文鈔』 徴定上人遺文集刊行会編、藤原弘道発行 記類三十一、三十二

- (14) 建中寺藏『当山歴代上人過去帳』より

- (15) 建中寺藏「華頂前門主養鶴大教正清譽を周忌追慕之詩」